

eラーニング大学院における既存科目を活用した ストーリー中心型カリキュラム導入に対する受講者の初年次反応分析

Analysis of the first-year students' responses about an online master's degree program based on Story-Centered Curriculum utilizing existing courses

小山田 誠^{1†}, 根本 淳子¹, 柴田 喜幸^{1*2}, 鈴木 克明¹
Makoto OYAMADA^{*1}, Junko NEMOTO^{*1}, Yoshiyuki SHIBATA^{*1*2}, Katsuaki SUZUKI^{*1}
^{*1} 熊本大学 ^{*2} 産業医科大学
[†] Email: oyamada@kumamoto-u.ac.jp

〈あらまし〉 熊本大学大学院社会文化科学研究科教授システム学専攻では、より高い実践力と理論的知識の血肉化を標榜し、2008年度からストーリー中心型カリキュラム(SCC)を導入している。本稿では、その初年次終了後における受講者アンケートを分析した。その結果、SCC化のコンセプトを受講者が一様に強く感じたとの結果は得られなかったとともに、前期と後期では反応が異なり、特に後期における演習科目の位置づけに改善の必要性が確認された。

〈キーワード〉 遠隔教育、ストーリー中心型カリキュラム、eラーニング大学院、授業設計、専門家養成

1. はじめに

eラーニングでeラーニング専門家を養成している熊本大学大学院社会文化科学研究科教授システム学専攻(以下、GSIS)では、2008年度から博士前期課程1年生を対象として、既存教材を活用しながら科目間統合を図るために「ストーリー中心型カリキュラム」(以下、SCC)を導入した⁽¹⁾。SCCとは、Schankが提唱したGoal-Based Scenariosをカリキュラム設計に応用したもの⁽²⁾で、カーネギーメロン大学西校等での提唱者自らの実践以外では、本専攻が最初の事例である。

初年次を終えた2009年2月にWebで行った受講者アンケートでは、「GSISではSCCの提供を続けるべきだと思いますか」という設問に対して、17名中(全受講者19名)13名が「はい」、4名が「どちらともいえない」と回答している一方、「SCCを選択することを後輩に勧めますか」という設問に対して、10名が「はい」、5名が「どちらともいえない」、2名が「いいえ」と回答しており、SCCの提供自体は継続すべきだが改善を要することが示唆されている⁽³⁾。本稿では、SCC導入の意図に即した質問項目(5件法と自由記述)を分析して改善の方向性を探った。

2. 分析の方法

GSISでは、表1左に示す【A】～【C】の3つをSCC化のコンセプトとして掲げている。前述のアンケートには、各コンセプトに対応する表1中の設問も含まれていた。

アンケートの実施時期は後期終了直後であるが、その時点で同時に前期についても振り返って回答するように求めた。また、6つの各設問に対して5段階評価で回答を求め、また、なぜそのように評価したのか、その理由を自由記述させた。5段階評価の回答は、分散分析(2元、対応あり)

と多重比較(scheffé法)を行い(表1右)、自由記述として得た評価理由を援用しながら受講者の反応を確認した。

3. 分析の結果と考察

全体的な傾向として、平均が4点を超える設問はなく、受講者が一様にSCC化のコンセプトを強く感じたとの結果は得られなかった。次に、分散分析では、[設問×学期]の交互作用のみが有意($p<0.05$)であった。また、多重比較では、A-1にて[前期<後期]、B-1、B-2、C-1にて[前期>後期]の有意差($p<0.05$)が確認された。

3.1 A-1についての考察

A-1では、16名中5名が[前期<後期]と評価し、うち2名が、「後期は、週報を書いたことで、“何に使えるノウハウか?”を考えたことは、良かったことだ。」に類する回答をした。

後期には、班毎に本学の対面授業一科目を実際に担当させ、そこで併用するeラーニングを企画・プロトタイプ開発する「eラーニング実践演習I」(以下、eL演習)がある。SCCにおける受講者は、前期開始時から架空のeラーニング開発会社(以下、MTM)の社員という設定であり、eL演習では本学にインターンとして派遣されるシナリオとした。その際、インターン活動をMTMに報告させることで、SCC化のコンセプトへと繋げるリフレクションを実現するために導入したものが「週報」である。よって、先の2名はその意図を反映する回答をしたと考えられる。

その一方、先述の5名中残り2名(他1名は自由記述なし)は、「後期は、より実務に近い部分(提案書、コンテンツ開発工程)を体験できたので、そういう意味では、前期よりも実践的と感じた」に類する回答を示しているほか、前後期ともに同じ評価とした受講者中3名は、「今回、得ら

表1: SCC化のコンセプトに対応するアンケートの設問とその結果 (n=16*)

SCC化のコンセプト	設問	前期の結果 平均(SD)	後期の結果 平均(SD)	有意差
【A】実践的場面の設定による応用力の強化	A-1: SCCによって得られた知識やスキルをどのように活用できるか意識するようになった	3.69(0.87)	4.00(0.89)	*
	A-2: SCCによって得られた知識やスキルの活用が高まった	3.63(0.81)	3.81(0.83)	
【B】科目統合による学習課題の焦点化	B-1: SCCによって科目間の関連性を意識するようになった	3.56(0.96)	3.13(1.02)	*
	B-2: SCCによってその週に要求されている課題が明確になり、学習内容を焦点化しやすくなった	3.94(0.93)	3.69(1.14)	*
【C】ストーリーへの没入環境整備による学習目的の意識化	C-1: ストーリーが付与されたことで、継続的な学習が実現できた	3.81(0.98)	3.38(0.96)	*
	C-2: ストーリーが付与されたことで、学習に没頭できる環境をつくることができた	3.56(0.96)	3.38(0.96)	

* 回答者 17 名中の有効回答者数, * p<.05

れた知識を活用したものに関しては、あまり SCC とは関係がない」に類する回答をしている。このことから、[前期<後期]と評価した者の中には、SCC として加えられた活動に対してではなく、既存科目に由来する学習効果を SCC の効果として評価した者が居るとも考えられる。

3.2 B-1 についての考察

B-1 の後期に対する評価は平均 3.13 と、本結果中で最低であり、16 名中 5 名が [前期>後期] と評価している。後期の評価を下げた要因として、2 名が先述の eL 演習に関連する内容を挙げており、うち 1 名は「インターン」と「MTM における業務」の 2 つが共存して混乱した点、もう 1 名は、科目間の関連性を考える上で「週報」を十分に活用できなかった点に言及している。また、残り 3 名には明確な類似点はなく、うち 1 名はその要因に明言がないほか、1 名は学習した内容をバラバラに認識していること、もう 1 名は協調学習が多くスケジュールに余裕を持てなかったことを挙げている。以上より、特に、eL 演習と他科目の関連性を意識させる統合的なフレームワークを後期に導入するよう改善する必要があると考えられる。

3.3 B-2 についての考察

B-2 では、16 名中 3 名が [前期>後期] と評価した。後期の評価を下げた要因として、2 名が先述の eL 演習に関連する点を挙げており、1 名が「後期は自分が GSIS の学生なのか、MTM の社員なのか、熊大でのインターンなのか、課題を取り組む度に、立場が混乱し、どの視点で課題を書くべきなのか悩みました」という意見を、もう 1 名が「eL (インターンを指す) と、SCC の絡みの希薄な科目があり、濃淡があるため、ストーリー自体が若干途切れるように感じた部分がありました」という意見を示した。また、残り 1 名からは、後期にある外部講師が担当する科目から SCC が機能しなくなったのではないかと指摘を得た。学習内容を効果的に焦点化させられるよう、eL 演習と他科目との関係性を調整するとともに、外部講師との連携を密にする必要がある。

3.4 C-1 についての考察

C-1 では、16 名中 5 名が [前期>後期] と評価している。ここではこの 5 名の意見を 3 つに集約できる。1 つめは、前期のストーリー展開は継続的な学習を促したという点で、3 名が言及し、うち 2 名は下記の後期と対比して記述した。2 つめは、後期では MTM における業務の他に「インターン」という特徴的な設定が挿入されたことで、ストーリーが断片化して継続的ではなくなったという点で、3 名が言及した。3 つめは、継続的な学習はストーリーではなく明確なメタ設定(初年次 SCC では 1~2 週毎にメタを設定)に起因するという点で、言及した 3 名中 2 名は後期に対して述べた。以上より、SCC における eL 演習の位置づけの再検討が求められると考えられる。

4. まとめ

SCC の導入とは、複数科目に渡る改革であるが、後期には、中核となるべき eL 演習と他科目とのアンバランスさが表出した。今後は科目間の調整に注力する必要がある。また、「週報」やスケジュール設定については、利点とともに不十分さも指摘されており、より効果を高めるために改善を図ることも有益と考えられる。最後に、「週報」を含む eL 演習に関する言及が各設問に対する自由記述で言及されていることから、1 つの施策が【A】~【C】の各コンセプトにどの様に影響するのかを包括的な視点から検討し、その整合性を高めることも重要であると考えられる。

参考文献

- (1) 鈴木克明, ほか: “eラーニングによる eラーニング専門家養成大学院へのストーリー型カリキュラム導入”, 教育システム情報学会研究報告, Vol.23, No.1, pp.65-68 (2008)
- (2) Schank, R.C.: “The Story-Centered Curriculum”, *eLearn Magazine*, Feature Article 47-1, Association for Computing Machinery (2007)
- (3) Suzuki, K., et al.: “Upgrading an online master’s degree program based on Story-centered Curriculum(SCC): A case study”, *Proceedings of ED-MEDIA2009*, pp.591-598 (2009)